

## 【研修報告】

## 第29回国際ヒューマンケアリング学会： シンポジウムでの発表を終えて

—— ヒューマンケアリング理論：教育・研究・実践への応用 ——

戸 村 道 子\*

### はじめに

第29回国際ヒューマンケアリング学会が、今年5月16日から19日までの4日間、米国ミズーリ州セント・ルイス市で、The Power of Caring: Gateway to Healing」というテーマで開催されました。今回、筆者は「Human Caring Theory: Application to Education, Research, and Practice」と言うタイトルで本学の稲岡文昭教授、シャロン・カンビー教授とともに、シンポジストとして参加する機会を得ました。ケアリングの著名な理論家や研究者らを前に、拙い英語でシンポジストとして発表することは、不安が大きいことでもあり、知的好奇心をくすぐられるスリリングな体験でもあり、まさに大きなチャレンジでした。そこで、今回の学会の概要および参加により得た知見について報告したいと思います。

### 第29回国際ヒューマンケアリング学術集会について

国際ヒューマンケアリング学会は「ケアリングを看護の本質である」と捉え、“文化ケアの多様性と普遍性”の看護理論家、Madeline Leininger の呼びかけによって1978年に研究会として始まった。そしてケアリング哲学を唱えケアリング理論家の Jean Watson や Delores Gaut, Anne Boykin, Carol Picard らの看護学者を中心に1989年に国際学会と発展し、毎年「ケア・ケアリング」に関心の深い看護教育者・実践者・研究者を世界中から集めている。第29回目を迎える今年は、昨年のオーストラリア、パース市での開催から、再び米国内に開催地を移し、ミズーリ州東部の最大都市セント・ルイス市で開催された。そして今年も日本、オーストラリア、カナダ、イギリスを始め、南アフリカ、フィンランド、台湾、タイなど11カ国から200名程度の参加があったという。

前述のように学会のテーマは、セント・ルイス市のシンボルで「西部開拓への玄関口」にあたる市を記念して建設された「ゲートウェイアーチ」(1964年)にちなんで「ケアリングのパワー：癒しへの玄

関口」と題されていた。

四日間にわたる学会の初日には、南アメリカ共和国から Dr.Nomafrench Mbombo による人間の尊厳、権利についての基調講演で開幕した。続いてのシンポジウムは、Richard Cowling, 「拡張する意識としての健康」ニューマンの看護論を確立した Margaret Newman, ケアリング理論の Jean Watson, そして統一体としての人間の科学 (The Science of Unitary Human Being) というシステムの中で、存在論的—倫理学的なレベルでケアリング概念を明らかにした Marline Smith によるものであった。「The Power of wholeness, Consciousness, and Caring: A dialogue on Nursing Science, Art, and Healing」というこのシンポジウムでは、相互プロセス、意識や超越、変化しながら進化するパターンといった概念の上で、「ケアリング」と「全体性」、「癒し」と「健康」の統合を考えていくものであった。これらのプレゼンテーションと、ディスカッションを理解するのは、非常に難しかった。その為、ディスカッションの具体的な内容についてここで触れることはできないが、代わって文献を紹介したいと思う。このシンポジストの一人、Marline Smith は、哲学的—形而上学的そして経験主義に基づいたケアリングの概念を明らかにし、ケアリング概念を構成する5つの意味を見出している。この文献は邦訳もされている (Smith, 1999/ 諸田他2001)。

この他、「ケアリングと教育実践」、「ケアリングと家族」、「ケアリング実践」、「審美的側面からのケアリング」、「ケアリングと悲哀・死」、「実践者のための自身へのケアリング・セルフケア」というテーマセッションに分かれて、演題発表・シンポジウムともに参加者のニーズに十分見合った充実したプログラムが組まれていた。

### シンポジウム：「ヒューマンケアリング理論：教育・研究・実践への応用」の概要について

本学の稲岡教授、カンビー教授と共に行った学

\* 日本赤十字広島看護大学

会最終日のシンポジウム：「Human Caring Theory Applications to Education, Research, and Practice」は、3部構成で行った。これらは1)「First year Student's lived experience of caring after a human caring theory class & clinical practicum in B.S.N. Program」(発表者：稲岡教授)，2)「Development of global partnerships for Human Caring」(発表者：筆者)，3)「Toward a caring-centered practice model: Practice theory development」(発表者：カンビー教授)である。

これらは、本学のヒューマン・ケアリングの教育理念の概要，「人間」，「サイエンス」，「関係」，「アート」という主要概念の具体的な講義と実習での展開方法，および学生によるケアリングの体験の質的分析の結果，また文化的・国際的視野からの教員の協同によるケアリング教育のアプローチ，および研究からの実践モデルについての内容であった(発表した演題の要旨は学会誌に抄録が掲載されている)。会場の参加者からの鋭い質問にたじろぎながら，またユーモアを交えながらの発表には，大きな反響を頂いた。自由で活発な意見交換のなかから，今後の教育への取り組み，ケアリングの「アート」と「科学」の統合について，多くの示唆を頂くことができた。これらの参加者からのフィードバックをもとに，ケアリング概念のもつ繊細さと強さ，また審美的表現を通して，感性豊かな「知」を目指した教育の探求をしていきたいと思う。

### おわりに

筆者にとって，この国際ケアリング学会の参加は3回目となったが，言葉の壁もあり大変緊張はするものの，この学会の権威的・形式的な学会のスタイルとは全く趣を別にした雰囲気には毎回大いに励まされる。また，発表演者の一方的なプレゼンテーションではなく，参加者と一体となって大切に「ケアリングの本質」について討議することは，新たなアイデアを頂く貴重な機会となった。そして，ケアリングの著名な研究者と直接会って話しているうちに，難しい理論や難解な概念が少し身近に感じて，人間性をもったものを感じてくるのも確かである。難解で抽象度の高い理論の真髄を，毎日の看護教育や実習指導の中にどのように活用していくか今後も課題として取り組んで生きたいと思う。

今回の発表は，日本赤十字広島看護大学より海外旅費助成を受けて行いました。貴重な機会を与えてくださいました本大学に深く感謝いたします。

### 文 献

- Inaoka, F., Tomura, M., & Cumbie, S.(2007).Human caring theory: application to education, research, and practice. *International Journal for Human Caring*,11(3) p52
- Smith, M(1999)/ 諸田直美他 (2001). ケアリングと統一体としての人間の科学. *Quality Nursing*,7(1), 33-46.



写真 1



写真 2



写真 3